

## 情報提供による副作用の防止等について

一般用であっても医薬品には、健康を維持し、あるいは病気を治す効果を有する一方で、健康を害する様々な副作用が生じうる。また、体質、薬の飲み合わせ、薬の飲み方等により、副作用が生じる可能性が高まることがある。

次のような事例においては、一般用医薬品の購入時に十分な情報提供をすることにより、副作用の発生を防止できた可能性があると考えられる。なお、平成14年度の一般用医薬品の副作用報告は265件あり、うち30件程度は副作用の発生を予防できた可能性のある症例である。

### 1. 過量投与・長期連用により発生した副作用

<u>40代 男性</u> <u>かぜ薬による肝機能障害、体重減少</u>	
服用開始	頭痛やイライラ解消のためかぜ薬を常用。 服用量も1回5錠→10錠→15錠と増加していく。 1日最大、200錠を服用することもあり。
服用開始2年後	全身倦怠感にて医療機関受診。肝機能障害
服用開始6年後	体重減少発現
服用開始7年後	かぜ薬服用中止。肝機能障害、改善へ

### 2. 併用禁止薬との併用により発生した副作用

<u>50代 男性</u> <u>かぜ薬等による間質性肺炎</u> [かぜ薬の服用時、かぜ薬・解鎮等は併用禁忌]	
服用開始	発熱により、風邪薬2種類と解熱鎮痛剤1種類を不定期に服用開始。
服用開始19日目	咳、呼吸困難が悪化し、医療機関へ。
服用開始20日目	間質性肺炎と診断。入院加療となる。
服用開始約2ヶ月後	症状軽快し、他施設へ転院。

### 3. 投与禁忌等の患者に投与して発生した副作用

<u>20代 女性</u> <u>解熱鎮痛剤によるアナフィラキシーショック</u> [本剤によるアレルギー歴は禁忌]	
副作用歴	解熱鎮痛剤による蕁麻疹
服用開始	月経困難症のため、解熱鎮痛剤を服用開始。
服用開始10分後	全身発赤、呼吸困難などのショック症状出現し、医療機関へ
服用開始1日目	治療の後、軽快退院となる。

<u>5ヶ月 女児</u> <u>かぜ薬による授乳児の発赤</u> [授乳婦は薬剤師等に相談すること]	
服用開始	母親が風邪症状にて、かぜ薬を服用開始。 患児は完全母乳のため、数時間毎に母乳を飲んでいて
服用開始3日目	患児に発赤出現。
服用開始4日目	かぜ薬の服用を中止し、医療機関A受診。
服用開始5日目	医療機関Aは、SJSを疑い医療機関Bへ紹介。
服用開始6日目	治療の後、軽快退院となる。